



2012 年 12 月号

滑稽俳句協会会長 八木 健氏 に聞く 50

紅線偏「滑稽俳句集」を読み解く 42 （聞き手 高橋素子）

高橋 > 立冬の虎造ひくく唸り出す 八木健

去る十月二十七日(土)の早朝、子供の頃 よく聴いていた廣澤虎造の浪曲を唸る懐かしい素敵な声がラジオから聞こえて……。あれは、『清水次郎長伝』中の『石松三十石船道中』でしたね。続いて、会長お得意の虎造節のひと節を交えてのご挨拶とご解説がありました。確か、お話の中でアナウンサーの方も言っていたと思いますが、あの様な時には浪曲だけでなく、会長のお話されるお声も虎造そっくりになって来られるのですね。先日のラジオ放送の事、少しお話下さいませんか？

会長 > それでは、NHKラジオのインタビューを再現してみましょう。

【八木創立名誉会長】 第二代の廣澤虎造は、大雑把に言えば、戦前から戦後にかけて活躍しました。ラジオの登場とともに全国に声がとどいて人気が出ました。昭和三十九年に六十五歳で亡くなりましたが、今ご存命だとしたら、百十五歳になります。

【古谷アナ】大変な人気だったようですね。

【八木】昭和二十七年の芸能人の人気投票で第一位、第二位は美空ひばりでした。昭和十二年に五千人も収容した、東洋一の浅草の国際劇場で公演したときは、四日間、昼夜興行で四万人が「虎造節に酔った」という記録があります。ラジオ放送があるときは銭湯が「カラ」になったのでした。浪曲は「一声、二節、三啖呵(たんか)」といいます。虎造師匠はすべてが絶品だったのです。ですから「虎造の前に虎造無し、虎造の後に虎造無し」と言われました。まさに不世出の浪曲師だったのです。まず、「声」の響きが良かった。声で酔わせたのです。「節」ですが、虎造は関西で修行

して『低い唸り』を特徴とする「関西節」を覚えて東京に戻り「甲高い華やかさ」のある「関東節」を習得したので、深みと幅のある語りができたのです。それから虎造は「声」が小さかった。小さな声だから、息が長く語ることができました。息長く語れたので抑揚が自在にできたのです。しかも、虎造師匠は普段の会話の声と口演の声とが同じでした。それは浪曲的なつくり声ではなかったということです。つまり、聴く者の耳に自然に伝わったのですね。

【古谷アナ】確かに浪曲は「張り上げて語りますね、虎造さんは、そこが他の浪曲師と異なるところですね。「啖呵」も巧かったのですね

【八木】口が良く回った。滑舌がいい。NHKのアナウンサーでも、とても太刀打ちできない。三拍子そろっていたからこそその芸です。虎造の芸は語り芸の最高峰ということで、NHKのアナウンサー養成に「石松三十石船道中」が使われているのです。

以上、大まかなラジオ番組の再録です。

高橋 > 成る程！虎造は浪曲的つくり声でなく、普段の小さな声で抑揚自在に浪曲を唸ったからこそ、視聴者の耳に自然に伝わったと…。「一声、二節、三啖呵」ですか？益々子供の頃聴いた虎造節が懐かしいものとなってしまいます…。今日は、廣澤虎造の面白い懐かしいお話で、前置きが長くなってしまいました。まだまだ、お話お聞きしたいところですが、遊んでばかりではいられませんので、それはまた、別の機会にまわさせて戴きます。

本日は前回に引き続き、紅縁編「滑稽俳句集」の「冬人事」の部、季語は「爐開」と「鉢叩」の句のご解説からよろしくお願い致します。

爐開きや鼻を並べて雨を聞く 子葉

一月は我に米かせ鉢叩 文章

木のはしの坊主のはしや鉢叩 蕪村

旅人に錢もらひけり鉢叩 佳呆

鉢叩の着たはあかつき衣かな 波光

竹買ひに來た親仁なり鉢叩 蘭更

さりながら腹もへるべし鉢叩 瀾水

傾城に錢もらひけり鉢叩 瀾水

傭はれて頭剃りけり鉢叩 紅縁

会長 > 「爐開きや鼻を・・・」、陰暦十月朔日または十月中の亥の日をえらんで、炉・炬燵を開き、火を入れはじめた古習ですね。〈鼻〉と〈聞く〉が対語になっていますね。つまり鼻と耳です。

「一月は我に米・・・」、鉢叩は、空也念仏で鉢を叩きながら門付けをしたらしいですね。平和を訴えるデモ行進みたいな感じでしょうか。その鉢叩きに 「米を貸せ」と言うのですから、庶民の暮しは窮乏していたものと思われますね。

「木のはしの坊主の・・・」、「はし」の地口ですね。初めの「はし」は「箸」。二番目の「はし」は、「端くれ」という意味ですが、「はし」と仮名書きにして「なぞなぞ俳句」にしています。

「旅人に錢もらひ・・・」、旅人が淨財としてご寄付したのですが、「もらひけり」と「お恵み」のように書いて、多少の揶揄となっています。

「鉢叩の着たは・・・」、これも地口の句で「あかつき」は「色」でもあり、「垢」として着衣の汚れを指摘してもいるのです。

「竹買ひに來た・・・」、「親仁」は「おやじ」と読みます。親爺のことです。今やって來た鉢叩きは、竹を買いに來た親爺だということです。

「さりながら腹も・・・」、熱心に鉢を叩くさまを見て「腹が減る」だろうと言っています。鉢を叩くのは「飯をくれ」と訴えるようにも見えますからね。

「傾城に錢もらひ・・・」、傾城は遊女のことですね。鉢叩きが遊女から施しを受けるとしてありますが、鉢叩きは「物乞い」のような一面もあったわけですね。傾城は私娼でなく、公娼でしたから、プライドもあったでしょうから。鉢叩きに施しをしたわけですね。

「傭はれて頭剃り・・・」、鉢叩きのアルバイトさんがいたということですね。剃髪して鉢叩きをするわけで、今の若者だったら、人気の無いバイトでしょう。

高橋 > なるほど、本来「鉢叩」は空也念仏を唱え、鉢を叩いて歩く半俗の僧のことだそうですね。でも、浄財を募っている僧なのか、僧の姿をした物乞いなのか……。句によれば、殆どは後者のようですね。

では、次にいいですか？ 季語は「寒念佛」と「薬喰」です。続けてご解説下さいね。

極楽の近道いくつ寒念佛 蕪村

鍋炭に髭つくりてや薬喰 只泊

薬喰人に語るな鹿ヶ谷 蕪村

薬喰隣の亭主箸持参 蕪村

客僧の狸寐入や薬喰 蕪村

火の神も見ゆるしたまへ薬喰 春鴻

薬喰和尚の留守の小僧哉 井村

会長 > 「極楽の近道いくつ・・・」、寒念佛は僧が寒の三十日間、明け方に山野に出て声高く念仏を唱えること。のちには俗人も寒夜、鉦(かね)を打ちたたいて念仏を唱え、家々の門前で報謝を請い歩いたものです。極楽に行くのが庶民の願いですから、寒念佛の僧に尋ねているわけです。「いくつ」は、たくさんあるだろう。教えてくれたら最短距離の道を選びたいということでしょうか。

「鍋炭に髭つくり・・・」、薬喰は肉を食べることですね。鍋の炭が顔について髭のようになった。楽しい笑い声が聞こえてくるような句ですね。

「薬喰人に語るな・・・」、鹿ヶ谷と言いますから鹿を食べたのでしょう。人に語るな
は、美味だということの他に、神の使いとして禁猟の動物だったということもあるので
しょう。

「薬喰隣の亭主・・・」、お相伴にあずかり箸を手にですね。

「客僧の狸寐入や・・・」、僧は肉食は出来なかったのでしょうか。寝たふりをして我
慢している可笑しさですね。

「火の神も見ゆるし・・・」、台所には「火の神」を祀りますから、一部始終を見られ
ているわけですね。

「薬喰和尚の留守・・・」、和尚様が居ては薬喰は出来ない。あるいは、和尚が薬
喰に出掛けたのかも。

高橋 > ふふふ！それは面白いご発想ですね。和尚さんも小僧さんも、それぞれが薬喰とい
うことも。

「薬喰」の句、まだまだ続きます。

薬には狸なんどもよかるべく 露月

煮えけりとささやく兄や薬喰 格堂

酒隠す行燈のかげや薬喰 格堂

欺いて客を去なすや薬喰 格堂

訪へば皿もて出るや薬喰 紅緑

会長 > 「薬には狸なんども・・・」、「薬」は「薬喰ひ」のことですね。狸もいいねと言ってま
す。狸汁にしたのでしょうか。

「煮えけりと・・・」、「薬喰ひ」は密やかにしたのでしょうか。殺生ですからね。

「酒隠す行燈の・・・」、「酒と薬喰ひ」は相性がいいですね。どことなく、隠れ喰ひと

なっています。

「欺いて客を…」、客には嘘ついて鶏ですなどと言うのでしょうか。客も承知しながらとぼけて、やはり鶏はいいなどと応じる。

「訪へば皿もて…」、皿に盛られて、堂々と出てきた。最大級の歓迎。

高橋 > 本日は特別に、廣澤虎造師匠のお話をいただきました。でも、どうしてあれ程たくさんの人々が廣澤虎造という人物と虎造節に引き付けられるのか。ご解説からその謎が解けて本当に嬉しかったです。今日もあっという間にお時間になりました。

次回の季語は「布団」からです。それでは、本日もご好評の虎造節でめて下さいね。

会長 > はいはい！それでは最後に虎造節のひと節を！

♪風邪ひいているらし 咳の吾子おおおおお

薬喰いでもさせるべくううう

布団着ている子を起こすううううう♪